

紙上の静物たち *Speaking Still Lifes*

2022年4月13日(水) ~ 7月10日(日)

絵画のジャンルのひとつとして親しまれている静物画の始まりは、17世紀のヨーロッパにまでさかのぼります。人々が織りなす物語場面に添えられていた様々なモチーフが、この時代に独立したテーマとして一枚の絵に描かれ始めたのです。

「死せる自然」とも呼ばれる静物画は、西洋の絵画ジャンルの中で長らく低い地位にありました。一方で、見慣れたモノを絵の主題とするからこそ、モチーフの組み合わせ方や描き方にあらわれる時代・地域の違いや作者の個性などが際立ちます。さらに版画の場合は、木版や銅版といった技法の違いも見どころでしょう。モチーフの親しみやすさと表現の多彩さに、静物画の魅力があるといえるのです。

本展では花や果物などを対象とする一般的な静物画だけではなく、器物の装飾デザインとして作られた版画、作者の手やまなざしによって物言わぬモノが語りだすかのような存在感をもつ作品など、約40点を紹介します。紙上にたたく様々なモノたちの閑談をお楽しみください。

※寸法はいずれもミリメートル

※支持体はいずれも紙

※所蔵はいずれも町田市立国際版画美術館

1 ヘンドリック・ホルツィウス Hendrick GOLTZIUS (1558-1617)

『聖母の生涯』より 洗礼者ヨハネのいる聖家族

The Holy Family with John the Baptist, from *The Life of the Virgin*

1593年 472×357 (版)

エングレーヴィング

2 作者不明 (推定制作地: ドイツ) German ANONYMOUS

釣鐘型杯のデザイン

Design of a Bell-form Cup

1580年頃 196×115 (版)

エッチング

3~5 ヴェンツェスラウス・ホラー Wenceslaus HOLLAR (1607-1677)

3

聖餐杯 (アンドレア・マンテーニャ?の素描に基づく)

The Large Chalice (after Andrea Mantegna?)

1640年 459×210 (版)

エッチング

4

女性像のある蓋付き高脚盃 (ハンス・ホルバイン(子)の素描に基づく)

Goblet with Cover, on Top with a Female Figure

(after Hans Holbein the Younger)

1645年 191×116 (版)

エッチング

5

ポセイドン像のある蓋付き容器 (ハンス・ホルバイン(子)の素描に基づく)

Vessel with Cover, on Top a Figure of Poseidon

(after Hans Holbein the Younger)

1646年 167×99 (版)

エッチング

6~7 吉田ふじを YOSHIDA Fujio (1887-1987)

6

ばら

Roses

1927年 369×247 (画)

木版 (多色)

7

きんぎょ

Goldfish

1926年 248×372 (画)

木版 (多色)

8 河合卯之助 KAWAI Unosuke (1889-1969)

『河合卯之助陶画集』より

From *Surface Designs for Ceramics: Kawai Unosuke*

1926年刊 各約385×310 (台紙)

木版もしくはリトグラフ

9~11 武田健夫 TAKEDA Takeo (1913-2013)

9

厨房静物

Kitchen Still Life

1954年 337×440 (画)

木版

10

俎上静物

Still Life on a Cutting Board

1954年 345×428 (画)

木版

11

窓辺静物

Still Life by a Window

1956年 486×355 (画)

木版

12~14 吉田穂高 YOSHIDA Hodaka (1926-1995)

12

私のコレクションより—緑色の壁、H. M.

From My Collection, Green Wall, H. M.

1982年 680×510 (画)

亜鉛凸版、木版 (多色)

13

私のコレクションより—杭、ルガノ

From My Collection, Stake, Lugano

1983年 680×325 (画)

亜鉛凸版、木版 (多色)

14

私のコレクションより—杭、井の頭

From My Collection, Stake, Inokashira

1983年 680×325 (画)

亜鉛凸版、木版 (多色)

15~16 三井淳生 MITSUI Atsuo (1929-2000)

15

石榴

Pomegranates

1970年 279×413 (画)

木版 (多色)

16

茄子

Eggplant

1975年 343×259 (画)

木版 (多色)

17~19 吉原英雄 YOSHIHARA Hideo (1931-2007)

17
フラワー
Flower
1976年 365×120 (画・版)
エッチング

18
フォーク
Forks
1976年 500×320 (画・版)
エッチング、アクアチント

19
コップとグラス (「剥奪された物」シリーズ)
Cup and Glass (series "Deprived Object")
1977年 363×325 (画・版)
エッチング、アクアチント、メゾチント (多色)

20~22 二見彰一 FUTAMI Shoichi (1932 生)

20
Coffee Time
1975年 325×240 (紙)
アクアチント (多色)

21
Tea for Two
1975年 325×240 (紙)
アクアチント (多色)

22
Alone Again
1975年 325×240 (紙)
アクアチント (多色)

23~25 城所祥 KIDOKORO Sho (1934-1988)

23
四つのリンゴのある静物
Still Life with Four Apples
1980年 400×550 (画)
木版 (多色)

24
赤い袋
Red Sack
1987年 200×150 (画)
木口木版 (多色)

25
青い陶器とブルー
Blue Vase and Prunes
1987年 200×150 (画)
木口木版 (版色)

26 赤瀬川原平 AKASEGAWA Genpei (1937-2014)

版画集『トマソン黙示録』より
From TOMASON APOCALYPSE
1988年刊 365×515 (紙)
オフセット

27~28 森野眞弓 MORINO Mayumi (1941 生)

27
DREAM (1)
1978年 600×720 (版)
エッチング (二色)

28
OBJECT-K
1982年 295×365 (版)
エッチング (二色)

29~31 盧治平 LU Zhiping (1947 生)

29
灰色空間
Gray Space
2011年 845×645 (画)
スクリーンプリント (多色)

30
素品
Objects
2013年 515×385 (画)
スクリーンプリント (多色)

31
潤物之三雨
Moisture No. 3 Rain
2012年 677×612 (画)
スクリーンプリント (多色)

32~34 馬場章 BABA Akira (1952 生)

32
プラネタリウム 小さな風景 (黒影) VI
PLANETARIUM-Miniature garden VI
1984年 420×515 (画・版)
エッチング、アクアチント (多色)

33
プラネタリウム 小さな風景 (大滝) VII
PLANETARIUM-Miniature garden VII
1985年 420×495 (画・版)
エッチング、アクアチント (多色)

34
プラネタリウム 小さな風景 (家) X
PLANETARIUM-Miniature garden X
1985年 420×515 (画・版)
エッチング、アクアチント (多色)

35 栗田政裕 KURITA Masahiro (1952 生)

木口木版画文集『山音』より
From YAMAOTO
1984年 各約 310×225 (紙)
木口木版

【浮世絵コーナー】

【前期展示：4月13日~5月26日】
鯛糸依摺物 椿の小箱と熨斗、誰袖
*Tainoitoyori Surimono: Small Box with Camellia, Noshi
Decoration and Toothpick Holder*
享和~文化期 (1801~1818) 140×189 mm

葛飾北斎 KATSUSHIKA Hokusai (宝暦10-嘉永2/1760-1849)
馬尽 馬のす *Various Kinds of Horse: Horse Tail Hair*
文政5年 (1822) 209×178mm

【後期展示：5月27日~7月10日】
鯛糸依摺物 淡雪豆腐 *Tainoitoyori Surimono: Awayuki Tofu*
文化期 (1804~18) 139×137 mm

けん玉と盃 *Cup-and-Ball and Cup*
文化5年 (1808) または文政3年 (1820) 105×190mm

「静物画」成立以前の画中の物言わぬモチーフは、人物を中心とした物語場面を演出する役割を担っていたといえます（出品 No. 1）。前景のハサミとカゴに入った布は、赤子のキリストを包むためのものでしょう。壺に活かくるられたユリは、聖母の純潔を暗示する代表的な持物（アトリビュート）です。

他の付随的な要素——右奥に広がる山や家並といった風景や、窓辺で鳥を捕まえる猫のようなモチーフ——も、16 世紀から 18 世紀のあいだに「風景画」や「風俗画」といった独立した絵画ジャンルとなっていきました。

輪郭線のみで杯さかざきの側面観を描いた作品（出品 No. 2）は、実際の器物にほどこ施す装飾デザインの手本として版画が利用されていたことを示唆しする作例さです。

一方、種々の容器を表したホラーの版画（出品 Nos. 3-5）は、彼のひごしゃ庇護者アランドル伯所有の有名画家による素描を複製したもの。アンドレア・マンテーニャ（1431-1506）やハンス・ホルバイン（子）（1497/98-1543）といった著名な美術家が手掛けた副次的な作品（素描）が、すでにコレクションの対象となっていたことと、版画がコレクターの名を広める役割を担っていたことをうかがわせる作例です。

明るい色調で風景や静物などを描き出した洋画家の吉田ふじを（本名・藤遠）は、早くから水彩画家として高い評価をうけ、晩年まで旺盛な制作を続けました。本展出品の吉田穂高（出品Nos. 12-14）は息子にあたります。

出品作（Nos. 6, 7）は、ふじをの下絵を夫の吉田博（1876-1950）が抱えていた専門の彫師と摺師が木版画としたもの。《ばら》（No. 6）の下絵では、背景が水彩の淡い階調で処理されていましたが、版画ではバレンの摺り跡を残す職人の技で濃淡が表現されています。

京都の陶工の家に生まれた河合
卯之助うのすけは、陶芸だけでなく絵画しつげいや漆芸
等の幅広い分野で活動しました。版画
の制作は、「自画じが・自刻じこく・自摺じずり」を
モットーとする明治末期からの創作
版画運動の流れを受けて始めています。

出品作 (No. 8) は、木版と石版 (リト
グラフ) の二つの技法で制作された
陶器の図案集。版面に直接描画する
石版画では、絵付けと同じ即興的な
筆致が目をはきまします。木版画では、
ときに荒く残された彫りの跡が、陶器
の量感ゆうやくや釉薬が生み出す質感といった
「手触り」を想起させます。

武田^{たけお}健夫（旧姓・鈴木）は版画家・
版画史研究家の小野^{ただしげ}忠重（1909-1990）
との交流をきっかけに、版画の制作と
発表を開始。1932年に小野が結成した
版画の大衆化を目指す「新版画集団」に
も参加し、学業（後には銀行勤務）
と両立させながら木版画の制作を
続けました。

出品作（Nos. 9-11）では、凸版で
ある木版の彫り残した黒い線の表現
にくわえ、彫ることで白く抜ける線を
陰影や質感表現に活かす、いわゆる
「白線彫り」も効果的に用いられて
います。

版画家の吉田穂高^{ほだか}は亜鉛凸版と木版を併用し、コラージュや写真を活かした版画を残しました。出品作 (Nos. 12-14) は、撮りためていた国内外の写真に基づいたシリーズ。作者によって抽出された身近なモノ——壁や標識等——が、地平線のみで奥行を示唆する空間に独りたたずむかのように配されています。

本来あるべき場所から切り離されて、実用に供することから解放されたモノたちは、あたかも意思を持ったかのような存在感をたたえています。日頃は目に留めることもない傷や経年の跡が、見る者に強く訴えかけてきます。

日本画家である三井^{あつお}淳生は、浮世絵に連なる日本の伝統技法による多色摺木版画も手がけました (Nos. 15, 16)。仏教版画や御札などの日本の木版画研究者としても知られています。

伝統木版画の復興を掲げた「新版画」は、「版元・画家・彫師^{ほりし}・摺師^{すりし}」の専門を活かした分業制であったのに対し、三井は「自画^{じが}・自刻^{じこく}・自摺^{じずり}」といった「創作版画」の系譜に連なる制作を行いました。一枚の絵としての完成度はもちろんのこと、肉筆と見紛うばかりの三井の版画の手業^{てわざ}も見どころです。

版画家の吉原英雄は、1955年に会員となったデモクラート美術家協会で、当時はまだ珍しかったリトグラフと出会います。この技法と銅版画を併用し鮮やかな色面と写真から引用・反復したモチーフを組み合わせたポップな作品を生み出しました。

二つの出品作（Nos. 17, 18）は、リトグラフと併用するために制作した銅版を単独で刷ったもの。不規則な形の版から刷られたモノの周りに広がる余白が見る者の想像力をかきたてます。同様の手法は後に「剥奪はくだつされた物」シリーズに結実することとなりました（出品 No. 19）。

ふた み しょういち は せ が わきよし

二見彰一は長谷川潔（1891-1980）の作品に感銘を受け、木版画から銅版画へ転向。アクアチントを中心とした銅版画の技法を独習し、詩や音楽の趣おもむきをもった作品を残しています。

出品作（Nos. 20-22）は、モチーフの形に沿って切り抜かれた複数の版を組み合わせて刷ったもので、一部に同じモチーフ（版）が用いられています。二見が版画を楽器に喩たとえていたことを思い起こすならば、構成／作曲（composition）の違いによって、同じ版／楽器から異なる音楽が奏でられているといえるでしょう。

父の影響で早くから美術に親しんだ城所^{きどころしやう}祥は、中学生の頃から木版画の制作を始めました。家業（家具製造・販売）を継ぐため、早稲田大学に進学するも、卒業時には版画家として立身することを決意。後には木口木版も独習し、日和崎^{ひわさきたかお}尊夫（1941-1992）らによる「鑿^{のみ}の会」の創設メンバーにも名を連ねています。

出品作は板目^{いため}（No. 23）、木口^{こぐち}（Nos. 24, 25）と異なる木版技法による静物画。前者の画面・色面構成からは、抽象画にも長けた城所の造形感覚がうかがえます。モチーフが照らされたかのように浮かび上がる後者では「光」そのものが表現の対象となっているかのようです。

あか せ が わ げ ん べ い

赤瀬川原平（本名・克彦）は、美術家として模型千円札や梱包芸術等の前衛的な作品を世に問うのみならず、パロディ漫画や小説の発表など、実に幅広い活動を展開しました。

その代表的なもののひとつが「トマソン」です（出品 No. 26）。赤瀬川は路上で見かけた全く意味や機能を成していない無用のモノを、プロ野球の読売ジャイアンツに入団するも全く役に立たなかった助っ人外国人の名にちなんで「トマソン」と命名。これらを分類・考察し、「超芸術」としての新たな価値を見出したのです。

森野眞弓は、日本美術家連盟主催の銅版画講座に参加したことをきっかけに、版画の制作を開始しました。後にはフェルト地を火で焦がすことで作画するヒートグラフという技法を開発しています。

出品作 (Nos. 27, 28) の帽子は、森野のライトモチーフのひとつ。正面観で前を見据えるかのように大きく描かれたモノたちは、見る者に語りかけるような存在感を放っています。よく見ると花や葉の集積によって形づくられている帽子は、生気を帯びているかのようにも感じられます。

デザイナー出身の版画家である
盧^る治^じ平^{びん}は、上海の版画会の指導者的
存在です。2002年には同地郊外に自ら
版画工房を設立し、市民や若手作家に
開放しました。2013年には日本でも
個展を開催しています。

出品作 (Nos. 29-31) では、器のシル
エットが並置されたり、重ねられたり
することで、平面的でありながらも
奥行が感じられる不思議な絵画空間が
作り出されています。また器のかたち
に刷り重ねられた模様や大胆な筆致が、
作品に装飾性と抒情性^{じょじょう}を生み出してい
ます。

ば ば あきら

馬場章は、精緻な描写や写真製版による銅版画技法（フォトグラビュール）で、幻想的な世界を構築。箱や庭に見立てられた画中には、様々な心象を引き出す事物が配置され、見る者の想像力をかきたてます。

出品作（出品 Nos. 32-34）では、馬場の「静物のイメージで風景を描けば面白い」という言葉どおり、風景の一部が画面中央にオブジェのように配されています。その後方にそびえる石板には天体の日周運動が刻まれており、時間の流れまでもが物象化されているかのようです。

創形美術学校で木口木版と出会った
栗田政裕くり た まさひろは、この技法の緻密な刻線に
よって、旅先で目にした風景や空想の
世界を版に刻んできました。城所祥き どころしょう
(Nos. 23-25) も名を連ねた「鑿のみの会」
の創設メンバーの一人でもあります。

出品作 (No. 35) は栗田自身の登山具
をモチーフとした画文集。鋭い刃先を
持つ彫刻刀であるビュランによって活
写されたモノたちは、各々に付された
作者の文章と相まって、雄弁むげんに自らを
物語ります。道具はときに心象風景と
交錯こうさくし、見る者を現実と夢幻のあいだ
に誘いざないます。